

## 法幢師大圓武志老師を想う

第十二回生 胡 建明

(駒澤大学仏教経済研究所)

仏教では、世間一切の物事を「縁」というキーワードで説明する習わしがある。よって、東アジアの人々は、どんなことと遭遇しても、思わずにこれは「何にかのご縁だ」という思考方法を持っている。

私は、天童山から日本に來た六年目の平成八年（一九九六）四月に、恩師南澤道人老師（当時永平寺監院）の紹介で、善光寺の大圓武志老師と縁を結ぶこととなった。というのは、当時、私は駒澤大学仏教学部で卒業して、ドイツのハイデルベルク大学大学院のインド哲学研究科に留学することを志していた。善光寺育英会の海外留学僧派遣のことを恩師から聞いた。四月のある快晴の日に、恩師と一緒に善光寺に訪れたのである。これが、大圓武志老師との初対面である。ドイツ留学を終え、東京大学大学院での研究を継続することになった。ある日の早朝、中野区成願寺の小林貢人方丈様に連れられて、善光寺に拝登して、大圓老師と再会した。大圓老師

は、「胡君、これからは私に随侍して、善光寺にいでください」と命じられた。それ以来、老師の膝下で法愛を受け、老師が遷化するまで離れなかった。

昨年は大圓武志老師の十三回忌の法要が厳修された。並びに大圓老師が開創した善光寺海外留學育英会は、三十周年を迎える記念すべき年である。

先日、現住職博志方丈と駒沢女子大学安藤嘉則教授から今年五月下旬に育英生の皆さんが善光寺に集まり、大圓老師の偲ぶ会と交流会を行うイベントの知らせを頂いた。その機にして、大圓老師との思い出を二千字程度のエッセイも寄せて下さいという依頼もあった。

大圓老師から受けた法恩は、たとえ二十万字でも書き尽くせないが、二千字で何を書けばいいのか、正直に戸惑いだ。

ともあれ、書くことには辞せないから、静かに思索の末、平成十二年（二〇〇〇）十月六日に、善光寺の冬安居において、私の首座と務め、法戦式を厳修されたことを回想して、記念文集に一文を添えることを決まった。

法戦式を行う為に、まず本師の南澤監院が永平寺から拝請された。そして駒沢女子大学東隆真学長を後堂として、篁素明教区長などの諸山の尊宿も拝請した。あの日、大圓老師は法幢師として、権大教師の黄恩衣を着し、僧堂中央に置かれた曲案に身を据えた。

法戦式は大圓老師が『従容録』第二則「達磨廓然」を提唱した。東学長は宗門の「結制」「首座」「法戦」について、その本義を解説した。法戦式は多くの宗侶と檀信の皆様の参列の中で、熊田慧照師が書記、弟の建偉君が弁事を務めて、滞らずに激しい禅問答を繰り返されて終了した。当日は韓国曹溪宗の留学僧李俊秀師をはじめ、多くの留学僧も出席した。善光寺らしい国際色豊かな儀式であった。その詳細は中外日報の形山俊彦局長が記事を書き、十月十九日の『中外日報』に登載した(写真1)。また、私も法戦式の写真を大事に保管して、参加者のメンバーを記した(写真2〜4)。その中では、私の師であり、友である明治大学文学部教授・默仙寺住職阿部慈園先生(当日配役は知蔵)が翌年に病歿したことが非常に惜しかった。私と大圓老師、安藤教授と一緒に、平成十二年の暮れのある寒い日、鶴見大学歯学部付属病院を訪ね、入院中の阿部先生に見舞い、その際に、阿部先生が涙声で大圓老師に自分の未成年弟子慈薫君に法脈をぜひ繋ぎたいという依嘱を託した。その後、間もなく善光寺で慈薫君の伝法式が執り行ったことも鮮明に記憶している。大圓老師が行った大慈悲心は、いまなお多くの宗侶と弟子たちに銘記していることを確信している。

翌年の春、大圓老師が壮行会を開き、善光寺の皆さんの期待を背負って、私と弟の建偉とともに大本山永平寺に上山し、専門僧堂で安居した。

私の大圓老師についての思い出は、数えきれないほどにある。今回は、私の十七年前に行っ

た法戦式を記しておきたい。これを以て、聊かに法幢師である大圓老師の法乳大恩を報謝したい。昨年（二〇一七）の暮れから今年の春まで約三ヶ月アメリカのカリフォルニア州の大学と仏教寺院で参学して来た。その間、アメリカの「ロサンジェルス禅センター」も訪ねていた。この道場は大圓老師の実兄前角老師がアメリカで開いた禅道場の一つであり、大圓老師とも非常に縁が深いところだそうである。「縁」って、なかなか甚深不可思議なものであることに改めてつくづくと感嘆するばかりである。

「縁」というのは、過去・現在・未来に連続するものと仏教がいう。もし時間というのは、永遠に間断なく連続するものであれば、かならずまた大圓老師と未来のいつか、仏世界のどこかで再び出会うのでしょうか。

ただ、私は老師の期待にはいまだ応じておらず、恩返しがなかなか出来ないことだけが、日頃慚愧と恐縮の念に止まれないばかりである。

これから、僭越不肖ながら、人々の為に、大圓老師のように、菩提心を起こして、仏道に精進して参りたく所存である。

本当に大圓老師の恩を忘れられない。そしてこれからは少しでも報いたいと思う。

平成二十九年春彼岸の日

